

中世王朝物語中の『日本国語大辞典』不載語彙

—『風葉集』不載の十一作品から—

小田 勝

The Terminology from the Medieval Stories of Japan Not Recorded in the “*Nihon Kokugo Daijiten*” (The Great Dictionary of the Japanese Language)”

ODA, Masaru

summary

“*Nihon Kokugo Daijiten* (2nd edition)” is the biggest Japanese dictionary, and is considered reliable because it is the standard for historical research. However, there are some words and vocabulary from medieval stories that are still not recorded in this dictionary. This paper documents such vocabulary and defines them.

索引語 (Key words)

日本国語大辞典 中世王朝物語 中世語 語彙

○ 本稿の目的

本稿は、『鎌倉時代物語集成 一〜七』（笠間書院・昭63〜平6）の全文から、『日本国語大辞典〔第二版〕』（以下『日国』と略称）に立項されていない語彙を抽出し、一覧に供するものである。併せて、『日国』に立項されていても中世王朝物語中の語義が記述されていないもの、立項も語義の記述もあるが近世以降の用例しかあげられていないものも示し、参照に供する。今回調査の対象とするのは、『鎌倉時代物語集成』所収の物語のうち、『風葉和歌集』不載の次の十一の物語である（括弧内は挙例時の略称）。

あきざり（秋霧）、風に紅葉（紅葉）、木幡の時雨（木幡）、恋路ゆかしき大将（恋路）、小夜衣（小夜）、白露、兵部卿物語（兵部卿）、松陰中納言物語（松陰）、山路の露（山路）、なよ竹物語（なよ竹）、葉月物語（葉月）

用例は、『鎌倉時代物語集成』の本文のまま、これをあげた^①。所在の表示は、巻数・丁数で示す。見出し語の後に、品詞名を、名（名詞）、形動（形容動詞）、副（副詞）、助（助詞）、助動（助動詞）のように略記し、動詞は、四（四段活用）、下二（下二段活用）のように活用型でこれを示す。品詞名の掲げられていない項目は、連語であることを示す。なお、形容動詞は語幹を見出しとする。

一 『日国』不載語彙

調査資料十一作品中の、『日国』に立項されていない語彙は、次の通りである。^②

▽あ行

【あざあざ（鮮鮮）】（形動）露骨だ。「あざ／＼なるさまに云なし、よ
り、われにもあいなき物を思はせ」(白露39ウ)

【あらしふかす（風吹）】荒々しい言葉を投げかける。「…など、ことは
おほくいひつゞけ、あらしふかせ給へど、ちからなき事にて」(恋路
五35ウ)

【いひしらふ（言―）】(四)「言いしらふ」の転。「…など云しらへど」
(白露1ウ)

【いへばえ】（形動）(中古の歌語「言へば得に」の「に」(打消しの助
動詞「ず」の連用形)を形容動詞の連用形語尾と誤認して生じた語)

言おうとしても言えない。「女御の御ありさまいへばえなり」(紅葉
一10オ)、「御心ざしいへばえならぬ御中にて」(恋路一3ウ)、「あさ
ましともいへばえ也」(恋路一4オ、二30ウ、二31オ、三68オ、五20
オ)

【いやめさ（否目）】（名）泣き顔をしている状態。「たゞいつとなき
やめさなれば」(山路25オ)

【おぢどころ（怖所）】（名）遠慮。「をぢ所をきたてまつり給へるさま
も」(恋路三55ウ)

【おほきらか（大）】（形動）大柄だ。「大きらかなるわらはの」(恋路一
14ウ)

【おもひふくむ（思含）】（四）心の中でひそかに思う。「思しふくむら
ん御心の中も、おしはかりきこえさせやりながら」(白露54オ)

【おれかへる（愚返）】（四）愚かである、の意か。「もてなしけはひは、
をれ返わかびてみえ給」(紅葉一8ウ、一10〇ウ)

【おろしがら（下柄）】（名）語義未詳。「このざうしのぬしの大納言の

君(＝女房ノ名)しも、はなぞめ(＝花染中納言)のをろしからなり
ければ」(恋路五31ウ)

▽か行

【かいこごむ】（下二）囲い込む。「かきねのうちも、なにのよをわたら
んとかいこごめりやうず(＝領ズ)らむと、あはれにはかなうみおろ
され給」(恋路一14オ)

【がはめかす】（四）がたがた音をたてる。「戸ヲ」うちつけがはめか
すをとかしかまし」(紅葉一20ウ)

【かみかど】（名）語義未詳。「占イデ」火のゑうをゑたり(＝火ノ曜
ヲ得タリ)。かみかどなり」(なよ竹三)

【から（柄）】（名）性質。性格。「ものめですこしし給からとおほゆ
るに」(紅葉二30ウ)

【くろみすぐ（黒過）】（上二）紙が真つ黒になるほど文字がびっしり書
かれている。「くろみすぎぬる御ことのはいとおほくて」(木幡57ウ)

【げんてうに（現兆）】（副）直ちに。「たゞいまげんてうによをもそむ
かばこそ、心あはた、しきもど□をはめ」(恋路五21ウ)

【こし】（形シク）重要だ。「大君ハ」まだいへなくおはしませば、
こしき事の見はからひは猶、この(＝継母ノ)御心をうかゞひ聞え
て」(白露24ウ)

【こころあつ】（下二）期待する。頼みにする。「けふはまがきの菊を心
あてつるに、きのふの程にうつろひかはること、定めなき世なりけれ」
(松陰一29オ)

【こころやう（心様）】（名）気立て。性格。「心やうもまめやかに、ま
ことしうよき物にて侍ぞ」(紅葉一23オ)

【ごらんじさす（御覧）】（中古の「御覧せさす」に当たる語）「見さす」

の尊敬表現。お目にかける。「御文を御らんじさせて」(松陰二23ウ、一7ウ、三5ウ、三26ウ、三31ウ)

【こりずま(不懲)】(形動)懲らないさま。「:~など、覚しやすらふこそ猶こりずまなる御心のどけさなれ。」(山路37オ)

▽さ行

【ざがり(座上)】(名)昇進。「御た³⁶ざがりなどは、まいてなにとかは御心にもそまん。」(恋路二39ウ)

【ざさし】(形シク)語義未詳。「れいのさ、しかるらん。」(紅葉一19オ)

【さしごと(指事)】(形動)指図がましく失礼なさま。「あまりさしごと³⁷に、けしからずおぼえ給を」(恋路二31ウ)

【さすろふ(流離)】(四)「さすらふ」の転。「いかなるうきめにさすろひなん」(白露12ウ)

【しかしかし(確確)】(形シク)きちんと整っているさま。「かゝる所のならひにて、しかくしからぬしつらいにて」(木幡26オ)

【したほり】(名)内心を見せないことの意か。「したほりの殿、御心地にも、すこしゆかしくなりぬるこそをかしけれ。」(恋路五33オ)

【すくよぐ(健)】(四)元気になる。「さる願共の力によりてにや、弥生の中頃よりすくよぎ給へる御けしきにて」(白露30ウ)

【そらはらだち(空腹立)】(名)怒ったふり。「そらはら立し侍らん。」(小夜下35オ)

▽た行

【たゆたゆし】(形シク)①(弛弛)気が抜けたさま。「わがおもひはつゝにむなしくとおほえたまへば、心もたゆしきまで、おほしめし

ほれたり。」(秋霧下1オ)②(怠怠)だるい。「御身もすこしあつしく、いとたゆく敷成給へば」(白露29ウ)

【たをる】(下二)語義未詳。文脈上は「輝くようだ、色っぽい」のような意が想定される。「えんに(艶に)たをれたりし」[端山内大臣ノ]御ひかりにこそをよはずとも、「按察使大納言ハ」などかはくちをしかるらむと」(恋路五14ウ)

【ついせむ(追従)】(四)「追従」を動詞化した語(こびへつらう。「なびくばかりとついせみ給に」(恋路五14オ)、「御めのと(世世話)のぞみ、ついせみよりたてまつらざりし。」(恋路二52オ)

【つなしづくる】(四)「つれなし作る」の転。無視する。知らないふりをする。「さだかに聞く、つなし作らば」(白露20ウ)

【つねさま(常様)】(形動)普通の様子である。「つねさまに見えたまへ。」(秋霧上7オ)

【つねし(常)】(形シク)普通である。「かくよのつねしき御かきざまもありけるは。」(恋路三62オ)

【ていにしたがふ】「体に従ふ」で「成り行きにまかせる」の意か。「ていにしたがひて、このおとづれ侍ものにぐして、あづまのかたへもまかり侍なばや」(紅葉二38ウ)

【としならべに(年並)】二年続けて。「わかき二人としならべに(年子デ)いでき給しこそは」(恋路一3ウ)

【とりがほ(取顔)】(形動)語義未詳。引き受けたという態度をいうか。「とり貞に云べきならねば、只、「承りぬ」と計聞えて立かへるを」(白露6オ)

▽な行

【ながめがほ(眺顔)】(形動)もの思いに沈んだ顔をしているさま。「ながめがほにのみつねは見えたまふ。」(秋霧上18オ)

【なかもり(中盛)】(形動)中が高い。鼻が高い。「まみをしのべ(

目ガ横ニ引キ伸ビテイル¹¹切レ長ノ目ヲイウカ、なかもりにて、からゑにかきたる女のうちはもちたるにぞに給える」(紅葉一八ウ)

【ながらか(長)】(形動) 長いさま。「紅のはかまながらかにきなして」(木幡四ウ)

【にがゑむ(苦笑)】(四) 苦笑する。「…と、にがえみながら」(恋路三57才)

【ぬかめ(額目)】(名) 目だけを上の方向にすること。上目。「大将はぬかめつかひてうかゝひありきつ、」(恋路五36才)

【ねんなし(念無)】(名) つまらない者。「なにがし(=私)がやうに、くづをれたるねんなしにてはよもあらず。」(紅葉一21才)

▽は行

【ひちちかし(泥近)】(形ク) 泥臭い。「さるひな(=鄙)のひちちかき所にならひて、よろづうる／＼敷物し侍れば」(白露50ウ)

【ひとりごち(独りごち)】(名) 独り言。「…と、ひとりごちしてゐる給へるに」(松陰一3才)

【びやう(屏)】(名) 屏風。「この、きへふきおろす山をろしのはしたなきに、ゆきもちりきてびやうにあたる。」(恋路五24才)

【ひわりめ(干割目)】(名) 「ひわれめ(干割目)」に同じ。乾いてひびの入った所。「物のひはりめより奥のかたをのぞき給へば」(白露34ウ)

【へしのく(庄退)】(下二) 押しつける。「大納言君のををばへしのけ給。」(紅葉一21ウ)

【ほふけくさし(法家臭)】(形ク) 仏教的な臭みがある。「『かゝるわざ(=魚ヲ捕ル事)をし給へる』と、おとゝの、給はするも、わかき御心にははうけくさくさくやおほしたまふらん。」(松陰四15ウ)

▽ま行

【まみつき(目見付)】(名) 目つき。「…とて、ともにみえ給へる御まみつきの、いとほなやかにみえさせ給へり。」(松陰四4才、五8ウ)

【まめやかこち】(名) まじめな気持ち。「かたおもひなるもよしなくおほえ給ふまゝに、まめやか心ちもくるしく」(秋霧下18ウ)

【みがしこ(身賢)】(形動) 自分だけ賢いつもりでいる。「…など身がしこにいひる給へるも、まんしんおそろしく」(恋路三64才)

【めぎは(目際)】(名) 目もと。「うちうなづき給へる御めぎはのにくきを」(恋路二46ウ)

【ものわらはし(物笑)】(形シク) 物笑いの種となる。「ともにありなば、物わらはしき事もぞあらめと」(松陰二17才)

▽や行

【やさしだち(優)】(形動) 遠慮がちで控えめなさま。「女性ノ」やさしだちなるかはゆさ」(恋路一18ウ)

【よのせき(世一関)】(名) 国家の柱石。世の固め。「今は北の政所と聞えさせて、世のせきになり給へり。」(小夜下72才)

▽ら行

【れいならず】(形動) いつもと違ってゐる。「からずどもの羽さきに文のありけるを、れいならずにおぼして」(松陰四23才)

▽わ行

【わたくしぶ(私)】(上二) ①私的なふるまいをする。「院、后宮も、わたくしびてなにとかはの給はせん」(恋路三77才) ②私的である。「ひめ宮をば、さて北政所と申さんも、猶わたくしびたるや。」(恋路二49ウ)

【わたくしわたくし(私私)】(名) 各自。めいめい。「わたくし／＼の

思ひさへやすげなかんめり。」(恋路五24オ)

【をこぶ(痴)】(上二)頭の働きがにぶい。「すこしをこびたるけいきなれど」(紅葉一20オ)

二 『日国』に語義記述がないもの

次に、『日国』に立項されているが、調査資料中の用例に該当する語義(意味)が記述されていないものをあげる。

【いろをかふ】境遇が変わる。「しひなれごろもの、かく計色をかへけんと」(松陰三45オ)

【うらぶれ】(名)疲れ。「まだきのふよりの御うらぶれにて、ここにおほのごもらせ給へるを」(白露51ウ)、「三位中将は旅のうらぶれとて、あそびにもか、づらひ給はず」(松陰五28オ)

【おもひつけごと(思付事)】(名)いかげんな思いつき。「れいのよの人の思ひつけ事をいひけるこそ」(紅葉一18オ)

【ことのはぐさ(言葉草)】(名)言葉。「ありし夜のことの葉ぐさを頼みにて」(松陰一6オ)

【たまゆら】(名)玉。「たのもしやなげく涙のたまゆらもひかりをみがくしるべなるらん」(紅葉二50ウ)、「このたまゆらやひかりそふらん」(紅葉二50ウ)

【たゆけし(弛気)】(形ク)けだるい。「やるかたなき心もなぐさめ、たゆけし身をもてなをせしを」(白露47オ)

【にがにが(と)】(副)面白くない顔をする。「院にみあはせたてまつりては、にがくとふしめにて、あらぬかたへみやりしを」(恋路五29オ)

【ものから】(接助)①につれて。「藤内侍ガ」橋のうへよりかへり見させ給へる「松陰中納言ノ」御おもかげの、ちいさうなり行物から、霧にうづもれ給ひしより、御心もかきくれさせ給へるに」(松陰二27オ)。②～上に。「内侍のもとへの『風ふけば草葉の露』とかけするすぢの露たがはざる物から、浅みどりのうすやうの、またおなじきぞなをあやしけれ。」(松陰三9ウ)

【ものとひ(物問)】(名)占い師。「げんありといふものといなどにもさへとひありくに」(小夜中57オ)

三 『日国』に近世以降の用例しかあげられていないもの

次にあげる語彙は、『日国』に立項があり、調査資料中の用例に該当する語義も記述されているが、近世以降の用例しかあげられていないものである。『日国』の用例は、その語の初出年の判断に、大きな影響力があるが、以下にあげる語彙は、その初出が近世以前に遡る可能性が大きいと思われる。

【ありつき(有付)】(名)結婚。「ありつきなどは、かけてもおぼしかけぬよしを、なに心なくかたりいで給へるに」(木幡15ウ)

【あをみだつ(青立)】(四)青色になる。「御庭の草はやう／＼あをみだちて」(松陰三23ウ)

【いみあき(忌明)】(名)服喪の期間が終わること。「は、うへかくれ給ひて、御いみあきにならせ給ひてより」(秋霧上27ウ)

【おひたち(生立)】(名)大人になるまでの成長過程。「このよのほかの(＝吉野ノ山デノ)をいたちも、人わらはれにやとおぼしけるに」(恋路一20オ)

- 【おもひぐさ(思種)】(名) 思い人。「みやの大なごんは、ありしおもひぐさのおもかげはわする、ときなく」(秋霧下15オ)
- 【かくまふ(匿)】(四) ひそかに蓄える。「さるべき調度のもて渡すべきなど、うちくまうけかくまへて」(白露26オ)
- 【かざごち(風心地)】(名) 風邪を引いたような感じ。「如何成御かざごちにて」(白露18ウ)
- 【し(氏)】(接尾) 人の姓に付ける敬称。「小野氏(＝小野道風カ)のかき置し物どもをうへより給はせて」(松陰三9オ)
- 【たまはうき(玉簪)】(名) 正月子の日に用いた、玉の飾りを付けた簪。「御文のはしにいとちいさう、『はつねのけふの玉はうき』とかき給へり。」(松陰一7オ)
- 【たんそ(嘆訴)】(名) 必死で訴えること。「無事出産ノ御いのり、山くゞてらくゞにぐわんをたて、きこえあるそうづ、そうじやう、いまこそと心をつくして、おのくゞたんそどもはなちて」(秋霧下38ウ)
- 【とやかく(と)】(副) あれやこれや。「とや角とはかなき事に、物を思さぬ時のまもなく」(白露25ウ)、「乳母はいとおしうて、よろづとやかくと事とひ奉れど」(白露35ウ)
- 【なれど】(接) けれども。「女君あながちに我事にはあらじかし。なれどふとなみだぐまる、も、いとおこなりや。」(木幡53オ)
- 【はしらす(走)】(四) 速く行かせる。「つま戸ぐちにおろし置き、馬ははしらすにげていてぬ。」(松陰二22オ)
- 【はぬけの鳥(羽拔鳥)】 羽毛の抜けている鳥。「うき巢をはなれたるはぬけの鳥の、くが(＝陸)にまよひけん心ちも角やと」(白露32ウ)
- 【ひたむき(直向)】(形動) いちずに。すつかり。「すべてひたむきに、かたよせきこゆべき事かは。」(白露49ウ)

【ひとむらしぐれ(一村時雨)】(名) ひとしきり降り過ぎる時雨。「むら時雨打通りて」(白露20ウ)

【ぶしぶし】(副) 人と人の仲が険悪なさま。「そばくしくふし」ながら、せちなる御心ざしには」(恋路五33オ)

【まがし(禍)】(形ク) 「まがまがし」に同じ。不吉である。不幸である。「あねうへたちみなまがくておはせんぞ。」(恋路三64オ)

【みあはせ(見合)】(名) 照合。「いかでさだかに見あわせする事あらん。」(秋霧下31ウ)

【ゆびをる(指折)】(四) 指を折って数える。「日数をゆびおらせ給ひければ」(松陰一30ウ)、「我御よはひをゆびおらせ給へるに」(松陰三21ウ)

【をさなだち(幼立)】(名) 幼い時の様子。「おさなき君だちをめされければ、ひめ君のおさなだちの、まがふ所のさぶらはぬにとて」(松陰五10ウ)

四 その他、注意される語彙

以下に示す語彙は、『日国』に記述があり、中世の用例が示されているものの、示された用例が御伽草子・狂言・抄物・記録体資料・辞書などであり、中世王朝物語の用例が示されていない語彙である。これらはいずれも平安朝の物語には現れない語であり、中世王朝物語の語彙上の特色を示すと思われるので、ここにその一部を掲出する。

【いくらほど】どれくらい。「としはいくらほどか。」(秋霧上32オ)

【いつくしげ】(形動) 美しい様子である。「わづかに十四五にやと見え、まがふべくもなくいつくしげにて」(秋霧上2ウ)、「まことにい

つくしげにらうたく見え給へば」(秋霧上21ウ)

【いふ(掛)】(名)礼。「ことさらいうして□給ぬるほどの御ようい」(恋路250ウ)

【いや】①(感)相手のことばを打ち消す気持ちを表す語。「さもともいやとも、たゞいまはきこえ給はぬ御さまぞ、いと心はづかしき」(恋路18オ、238オ、240オ、紅葉230ウ)。②(形動)嫌だ。「あかすいやとおぼしたり」(恋路125オ)

【いる(焦)】(四)いらだつ。じれる。あせる。「いかにせんといられ給へど」(白露2ウ)

【うけはし】(形シク)呪わしい。「なに事につけてもうけはしき女御の御事を、かくのみもてさはぎきこえ給うちのおとゝを、心づきなしとのみむすほ、れ給へり」(恋路232ウ)

【うろくづ(鱗)】(名)鱗をもつもの。魚。「おもひきや身をうろくづとなしはて、宇治のあじろによらん物とは」(松陰56オ)

【かかり(掛)】(名)①建物の造り。「いと面白きに作なしたる家のか、り、ひなびたるけはひまじらず」(白露28ウ)。②風情。様子。「ひろき海原の波にまがひてうかび出でたる鳥のか、り」(白露29オ)

【さうざうし(騒騒)】(形シク)騒がしい。「…などさうさうしきまでいひあいければ」(兵部卿43オ)、「そのころあづまのえびすおこりて、いとさうさうしかりければ」(松陰15ウ)

【さげしむ(蔑)】(下二)軽んずる、軽蔑する。「よにふり給へるとさげしめきこえしに」(恋路249ウ)

【すぐに(直)】(副)直接。「ぜんさい宮わたしきこへて、いまはすぐに「琴ヲ」ならはせきこえん」(紅葉246オ)

【すわる(座)】(四)座る。「おまへに東宮のすはらせたまひけるに」(松

陰533オ)

【そらみみ(空耳)】(名)聞いていないふりをする事。「そらみ、作りつ、伏たれば」(白露5ウ)

【てざはり(手触)】(名)手で触った感触。「身なりなどみがけるやうなるてざはり、女のさまよりもをかしげ也」(紅葉118オ)

【などころ(名所)】(名)名所。「名どころどもをかきたる屏風にて」(松陰412ウ)

【にひどの(新殿)】(名)新しく造った屋敷。「女君は、おほちおとゝより給り給へるにいどの、めでたき玉のうてな、…此頃ぞうつろひ給ひて」(白露54オ)

【ぬけあし(拔足)】(名)足音をたてないように歩くこと。ぬきあし。「ぬけあしして返ぬ」(紅葉237ウ)

【ねぢけびと(拗人・佞人)】(名)心がひねくれた人。「あまたの人にうきめを見せつる、ねぢけ人にこそあれ」(松陰336ウ)

【のきぐち(軒口)】(名)軒の先端。「軒ぐちのしろう見ゆるは」(松陰31ウ)

【はる(晴)】(四)束縛・禁制が解ける。「御いみはれぬれば」(秋霧上14ウ)

【ふうふ(夫婦)】(名)夫婦。「おり／＼とぶらひたてまつるおひ人ふうふ(＝老人夫婦)ありしをおもひいで、」(兵部卿36ウ)

【まゆつくり(眉作)】(名)黛で眉をかくこと。「御まゆつくりなどは、御てづからせさせ給へば」(紅葉121ウ)

【みまひ(見舞・見廻)】(名)病人を訪ねること。「こはいかと思しさはぎて、いそぎ御見廻に人奉らせ給ふ」(白露17オ)

【やさし(優)】(形シク)思いやりがあって優しい。親切だ。「とした

けぬる身にやさしくいふに」(紅葉二38ウ)

【やや(児)】(名)赤子。「や、の御あそび(＝誕生ノ祝宴)いへばおろか也。七夜の御うぶやしなひ、院よりせさせ給。」(恋路五43オ)

【ゆららか】(形動)ゆらゆらとしているさま。「髪ゆら、かにつや／＼とか、れるうしろでなど」(白露6ウ)

【よこる(横折)】(下二)横に曲がる。「御車をよこおれて、五条をひがしざまにゆかせ給へば」(松陰一27ウ)

五 おわりに

以上、本稿では、『鎌倉時代物語集成』所収の物語のうち、『風葉和歌集』不載の十一の物語から、(一)『日国』不載語彙六一項目、(二)『日国』に語義記述がないもの九項目、(三)『日国』に近世以降の用例しかあげられていないもの二項目をあげた(項目数には連語を含む)。中世王朝物語の国語学的研究は、著しく立ち遅れている分野であって、なお語彙・語法の基礎的調査の継続が求められる段階にあるといわなければならないのである。

注

- (1) 用例中の「(＝)」は小田の注記である。用例中の「…」は本文を省略したことを示す。また、データ処理および印刷の都合上、用例中の二字の踊り字を、スラッシュを用い、「／」のように表示した。
- (2) 品詞の異なる、「あざあざ」(副)、「いやめ」(名・形動)、「から」(語素)、「げんちよう(現兆)」(名)、「こりずまに」(副)、「つねさま」(名)は立項されている。

(3) 『中世王朝物語全集』⑩は本文を「あさあさなる様に言ひなししより」とし、「あさはかな作り話をしたせいで」と訳す(二三三頁)。形容動詞「あさあさり」も立項がない。

(4) 『中世王朝物語全集』⑧は「初めての恋人」と訳す(一九四頁)。

(5) 「か(が)わめく」(四)は立項されている。

(6) 「巨々し」で、重大な、の意に用いているようである。「片岡利博『白露物語』の基礎的研究―早稲田本の成立年代をめぐって―」『文林』31)

(7) 連語「さらはらを立つ」は立項されている。

(8) 「たゆたゆし(揺蕩)」(形シク)は立項があり、語釈は「あちこちにゆれ動いて定まらない状態である。ぐずぐずしている。」となっている。同語の可能性もあるが、ここに掲出した。

(9) 「源氏」の中に「つなしにくし」という語があり、『河海抄』では「強顔つれなし也。れの字を略していふ也」と注している。「つなし作る」は、こういつた理解に基づく造語で、「つれなし作る」と同意で、知らないふりをする、の意。『中世王朝物語』『白露』詳注(六五頁)。なお『日国』の「つれなしにくし」には「語義未詳。一説に、つれなく、にくたらしい、冷淡でにくくしいの意という。」とある。

(10) 「身、かしこに」と読む可能性もあるが、形容動詞「かしこなり」も立項がない。

(11) 「わたくしびる」(自ラ下二)は立項されている。

(12) 参考「いみもやう／＼あきぬると云々つかた」(白露15ウ)

(13) 『日国』の用例は「湖畔手記(1924)〈葛西善藏〉」である。

参考文献

- 市古貞次他『中世王朝物語全集』全二十三巻(笠間書院・平7)刊行中)
- 辛島正雄「校注『風に紅葉』」『文学論叢』(九州大学)36(平2)・37(平4)
- 名古屋国文学研究会「小夜衣全釈 付録索引」(風間書房・平11)
- 片岡利博「白露物語」の基礎的研究―早稲田本の成立年代をめぐって―『文林』31(平9)
- 中島正二・田村俊介『中世王朝物語』『白露』詳注(笠間書院・平18)

- 宮田和一郎「兵部卿物語」『武庫川学院女子大学紀要』4（昭31）
- 小田勝「松陰中納言物語」語法考』『岐阜聖徳学園大学国語国文学』29（平22）
- 大槻修「中世王朝物語の研究」（世界思想社・平5）
- 田淵福子「中世王朝物語の表現」（世界思想社・平11）

